『物質と記憶』における心身問題

――二章のヴァリアントとの比較を通じて――

天野恵美理

0. はじめに

ベルクソンの第二主著である『物質と記憶（*Matière et mémoire*）』（以下 MM）は、「適切な一例、すなわち記憶力(mémoire)[1]の例について」(MM1)、心身問題を扱った著作である。そこでは、記憶力と身体との関係について、以下のように言われる。「すべての事実、またすべての類推は…記憶力を実在へと方向付け(orienter)、記憶力を現在に結びつけるという機能のみを身体に帰しつつ、この記憶力そのものを物質から絶対的に独立したものとみなすような理論に有利である」(MM198)。

身体が記憶力に対してもつ関係を、「記憶力を実在へと方向付ける」機能と、「記憶力を現在に結びつける」機能のみに限定するという、この考え方は、MM 全体を特徴づける重要さをもつ。

さて、MM は、四つの章から成るが、第二章の大部分と第四章の前半にあたる記述は、MM の刊行に数ヶ月先立って、前者は「記憶力と再認(Mémoire et reconnaissance)」（以下 MR）[2]として、後者は「知覚と物質(Perception et matière)」として、それぞれ異なる雑誌に、独立に読むことの出来る論文として掲載されている。いずれの論文においても、冒頭に、「近日中に刊行予定の書物からの抜粋」との注記があるにもかかわらず、MM への統合に際しては、両ヴァリアントに修正が施されているのであって、とりわけ MR に対しては、「知覚と物質」と比べて圧倒的に多数の修正が施されている。したがって、これらヴァリアント、とくに MR からの変更が何に存しているのかを見極めることで、全体としての MM を統制している指針が浮かび上がると考えるのは、不自然なことではないだろう。

本稿の考えでは、MR と、決定稿としての、全体性における MM とを比較することで、以下のことが明らかにされる。すなわち、冒頭で述べた、身体が記憶力に対してもつ二つの機能のうち、「記憶力を現在に結びつける」という機能は、MR の時点においてはなお見出されておらず、身体に対するこのような機能の認定は、MM において新たに見出される考え方である。

そこで、本稿は、以下のような手順で考察を進める。まず 1 節において、MM において認められる、記憶力に対する身体の二つの機能、すなわち、「記憶力を実在へと方向付ける」

機能と、「記憶力を現在に結びつける」機能について確認しておく。これらの機能のうち、後者のものこそが、時間的な機能であると言える。次いで 2 節で、MR においては、これら二つの機能のうち、身体が「記憶力を現在に結びつける」という機能をもつということが、なお明確に認められていなかったと考えられる事情を示す。最後に 3 節において、MM において身体に対してこのような機能が新たに認められたのであるなら、この導入は、MM 全体の読解に対していかなる示唆を与えるものであるのかを述べることとしたい。

1. 記憶力の「先端」としての身体が、記憶力そのものに対して果たす機能

ベルクソンは、MM において、また MR においても、記憶力そのものである「純粋記憶力」と、脳の感覚–運動系において認められる「身体の記憶力」とを区別する。そして MM において、「身体の記憶力」のうちに、「記憶力を実在へと方向付ける」機能と、「記憶力を現在に結びつける」機能とを明確に認める。

本稿は、「記憶力を現在に結びつける」という「身体の記憶力」の機能が MM において新たに明確化されたということを主張することを旨とするが、そのための準備として、まずは、1.1 において、MR においてもすでに認められている、「純粋記憶力」と「身体の記憶力」とのあいだの区別を示す。次いで、1.2 において、これら二つの記憶力のあいだの結びつき—両者の結びつきについては、MR や MM 二章においては言われておらず、MM 三章においてはじめて示される—について、その概要を確認する。「身体の記憶力」は、「純粋記憶力」に対して二つの機能を持つとされるから、続く 2 つの節（1.3 と 1.4）では、「身体の記憶力」と「純粋記憶力」との結びつきを、二つの点からそれぞれ説明する。1.3 では、「記憶力を実在へと方向付ける」という身体の機能について、1.4 では、「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能について述べる。

1.1 二種類の記憶力

ベルクソンは、人が「記憶力」という名で呼ぶものについて、「深く異なった二つの記憶力がある」(MM167)とした。一つは、「習慣が組織した感覚–運動諸系の総体からなる身体の記憶力」(MM169)であり、もう一つは、「過去の真の記憶力」(ibid.)すなわち「純粋記憶力」である。そこで、まずは、「二つの記憶力」のそれぞれについて確認し、その後で、純粋記憶力との関わりにおける身体の記憶力の二通りの機能について見ていくこととしたい。

まず、身体の記憶力とは、「運動的諸習慣という形態のもとでの過去の記録(enregistrement)」(MR229 / MM89)である。「我々の身体」は、このような仕方でのみ、つまり「諸運動装置という形態のもとでのみ、過去の行動を蓄えることが出来る」(MM81-82)。

次いで、純粋記憶力とは、「我々の日常生活のすべての出来事を、それらが展開するにつれて…記録するであろう」(MR226 / MM86)ものであって、こちらの記憶力が、「すぐれた意味での記憶力」(MR229 / MM89)とされる。

たとえば、一般的に言って、詩が暗唱されるのは記憶力の現象と思われているし、また、詩が暗記されるに至るまでの、「二回目とか三回目とかの特定の朗読」の記憶も、記憶力の現象と思われている(MR225 / MM83)。しかし、前者は、身体の記憶力の側に、後者は純粋記憶力の側に、それぞれ属すると見ることが出来よう。

二種類の記憶力のあいだのこうした区別自体は、MR と MM 二章においても述べられているが、そこではなお、「それらの結びつきは示されていなかった」(MM168)。二種類の記憶力のあいだの「結びつき」が示されるのは、MM 三章においてである。そこでは以下のように言われる。なお純粋記憶力の領域にある純粋記憶が「それに対して応答するところの呼びかけは、まさに現在から出発するのであり、記憶が自身に活力を与える(donne la vie)熱気を借りているのは、まさに感覚–運動的諸要素からなのである」(MM170)。つまり、純粋記憶力は、「決定的な過去における」(MM168)記憶力であり、純粋記憶力によって蓄えられた諸「純粋記憶」は、身体に対して「本質的に無力」(MM152)なのであって、「たえず再開する現在において動く(se mouvoir)」(MM168)ものである身体の記憶力の働きかけを条件としてこそ、純粋記憶力は「決定的な過去において動く」(MM168, 強調引用者)とされているわけである。

そこで、以下では、純粋記憶力の動きと突き合わせながら、身体の記憶力が純粋記憶力に対してもつ機能の二側面を確認していく。

1.2 純粋記憶力に対する、身体の記憶力の二つの機能

手始めに、図 4 を参照してみよう。

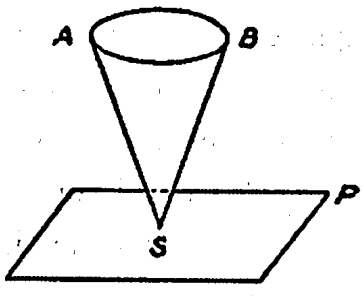

Fig. 4

身体の記憶力のあり方は、「私の記憶力において蓄積された諸記憶の総体をあらわす」「円錐形 SAB」の図(MM169)において、「決定的な過去」と対比されるかたちで、頂点 S として、以下のように述べられる。「底面 AB は過去に座して不動のまま留まるのに対して、あらゆる瞬間に(à tout moment)私の現在を象徴する頂点 S は、不断に前進し、宇宙についての私のアクチュアルな表象である運動面 P に、やはり不断に接触する」(ibid.)。「運動面 P」とは、「私の身体」もその一部をな

すところの物質的世界を示しているのであって、これは「経験の動く平面」(ibid.)とも呼ばれる。そして身体はこの平面においては、平面を構成する外的諸対象とのあいだで、作用・反作用のやりとりをするに留まるとされる(ibid.)。

この図は、身体をあらわす $S^{(3)}$が、円錐形の頂点でありながら、かつ、面に接触するものとして面の一部でもあることを直感的に理解させるものであろう。記憶力の先端としての身体の記憶力は、記憶力全体とともに「前進する」という側面と、物質的世界と「接触」していて、あるいは物質的世界の一部をなしていて、外的諸対象とのあいだで運動のやりとりをするという側面との、二つの側面をもつのである。次節以降で詳しく見ることになるが、これら二側面が、身体が記憶力に対してもつ二つの機能、すなわち、「記憶力を現在に結びつける」機能と、「記憶力を実在へと方向付ける」機能とに、対応していると考えられる。

本稿は、このうちの前者の機能が MM において新たに導入されたものであることを主張しようとするものである。そこで、以下では、この前者の機能の性質をよりよく理解するためにも、まずは後者の機能について簡単に確認し、それから、前者の機能について見ていくこととしたい。

1.3 「記憶力を実在へと方向付ける」という身体の機能

ここでは、身体が記憶力に対してもつ、「記憶力を実在へと方向付ける」という機能について見ていこう。

さて、純粋記憶力は、身体の記憶力からの「呼びかけに対して」、「二つの同時的な運動によって答える」(MM188)とされる。これらは、「並進(translation)」と「自転(rotation)」と呼ばれるのであり、そのうちの「自転」については、「これによって記憶力は目下の状況へと方向をとり(s'oriente)、最も役立つ面をそこへと差し向ける」(ibid.)と言われる。そこで、「記憶力を実在へと方向付ける」という身体の機能は、記憶力の「自転」を引き起こす働きであると言える。この「方向付け」は、現在の行動に「役立つ」ことを目指してなされるものである。

物質的世界（図 4 の面 P）において、身体は、「運動を受けとっては返しつつ」他の諸対象同様に振る舞うとされるが、「私の身体は受けたものを返す仕方をある程度選んでいるようにみえることにおいてのみ、異なっている」(MM14)。つまり、物質的世界と「接触」しているものとしての身体は、外的世界から受けた刺激に対して有益な仕方で反作用することを目指しているから、純粋記憶力によって蓄えられた諸記憶から、現在の行動への示唆を得ようとする。それに応えて、純粋記憶力は、「現在の状況に類比的な諸状況に先行した

あるいは後続したことの諸イマージュを示し」、身体の記憶力の「選択に光をあててやる」(MR233 / MM95)。このように、「記憶力を実在へと方向付ける」働きによって、身体の記憶力は、純粋記憶力のうちから、「現在の状況を有益に照らしまた補完するもののみを、受け入れる」(MR229 / MM90)。

以上から、「記憶力を実在へと方向付ける」機能は、行動のための有益な記憶の選択に関わると言える。

1.4 「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能

次いで、純粋記憶力に対する身体のもう一つの機能、「記憶力を現在に結びつける」という機能について見ていこう。

MM 三章において、「私の現在とは、…私を行動へと駆り立てるものである」(MM152)と言われる。だから、ある記憶が現在的になるとは、その記憶が、身体に対して影響力をもつようになるということである。それゆえ、「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能は、身体に対して力をもたない諸純粋記憶に対して、「身体を捕らえ、具現化され、つまりは現在となる手段(moyen de prendre un corps, de se matérialiser, enfin de devenir présents)を提供する」(MM169-170)[(4)]ということに存すると言えるだろう。

そして、身体の記憶力が諸純粋記憶に対して現在化のための手段を提供するにしても、身体の記憶力それ自体は、あくまで、純粋記憶力ないし「記憶力そのもの」からは区別される、記憶力の「動的先端にすぎない」(MM169)のであるから、ある記憶がこの「手段」を活用するためには、「その記憶は、純粋記憶力の諸高みから、行動が遂行されるまさにその地点にまで、降りてくることが必要である」(MM170)。そこで、純粋記憶力の「並進」の運動が要請されると考えられる。

「並進」とは、「それによって記憶力が全面的に経験に向かって進み、行動を目指して、分かたれることなく多少とも収縮する」(MM188)ところの運動である。「並進」の運動において、「記憶力自身が我々の過去の全体とともに前への押し出し(une poussée en avant)を遂行して、自らの可能な最大部分を現在の行動に組み入れる」(MM187)とされるから、身体の記憶力の前進の推力そのものは、記憶力全体が過去から前進して現在化しようとする運動に負っていると言える。そして、諸純粋記憶に対して現在化のための手段を与えるのは身体の機能なのであった。よって、図 4 に関して示されているような、身体の「不断」の「前進」は、記憶力全体の前進の運動のうちの、最後の段階に当たると見ることが出来る。

元来身体に対して力をもたないものである純粋記憶は、行動ないし身体のほうへと降りていくにつれて、「対応するすべての諸感覚を身体のなかに引き起こす傾向をもつ(*tendre*)」

(MM146, 強調引用者)が、身体の側が、こうした傾向を最終的に引き受けて実現させ、記憶に「少なくとも生まれかけの感覚」(MM156)を引き起こさせるのである。身体によるこの最終的な手段の提供がなければ、記憶は現在化することが出来ない。

身体による記憶の現在化に際して、「感覚的と言われる諸中枢の諸震動」が生じているとされ、こうした「諸震動」は、身体の「諸運動を開始しつつ準備することを正常な役割とする」ものとされる(MM146, 強調引用者)。それゆえ、「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能は、結果的に、過去を未来へと結びつけるものと言えるだろう。

記憶力の「方向付け」をするという、先に見た身体の機能が、諸記憶の選択に、したがって諸記憶の内容に関わるのに対して、「記憶力を現在に結びつける」というこちらの機能自体は、かれこれの記憶の内容に直接関わるものではなく、記憶力全体の未来への前進の先端をなす。そして、「記憶力を実在へと方向付ける」という身体の機能が、身体に、「物質的世界」つまり面 P において、「受けたものを返す仕方をある程度選ぶ」ような仕方で諸事物とのあいだで作用・反作用のやりとりをするのを可能にしているということを思い起こすならば、作用・反作用のやりとり自体はやはり平面的なものであるのに変わりないから、「記憶力を現在に結びつける」という、本節で見てきた身体の機能のほうこそが、過去を未来へと引き延ばすという点において、身体と、物質的世界における諸事物一般とのあいだに、時間的な差異つまりずれを生じさせていると言えるだろう。身体のこちらの機能のほうこそ、すぐれて時間的な機能であると言えるのである。

2. MR からの変更

2 節では、1.4 で見た、「記憶力を現在に結びつける」という機能、つまり諸純粋記憶に対して現在化の手段を提供するという役割が、MR においては身体に対して明確に割り当てられていなかったと考えられる事情を、いくつかの点について見ていく。

2.1 イマージュ

MR においては、「イマージュ」という語は、Robinet(1960, p. 375)が言うように、「心的対象を指し示すために画一的に用いられている」が、そのうちで 52 箇所が、MM の執筆段階において、「記憶」という語に書き換えられている。

MM においては、ある記憶が「イマージュになる(devenir image)」(MM156)とは、それが「少なくとも生まれかけの感覚」(ibid.)を引き起こすことができるようになるということを指している[(5)]。そして、記憶が感覚を引き起こすことが出来るようになるのは、記憶を現在化するという身体の働きを通じてなのであった。つまり、MM において、「イマージ

ュ」とは、記憶を現在化するあるいは「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能を通じて、記憶がそれへとなるところのものであるのだ。実際、MR から MM にかけて新たに書き加えられた記述において、記憶を現在化するという身体の機能に障害がある場合には、「障害は…イマージュ化の(*imaginatif*)機構にかかわっている」(MM119, 強調引用者)と言われている。

したがって、MM においては、身体に記憶を現在化ないしイマージュ化するという役割が明確に割り当てられたがゆえに、それまで画一的に「イマージュ」と呼ばれていたもののうち、なお感覚を生み出すことの出来ないものが、「記憶」と書き直されねばならなくなったのだと考えられる。MM においては、身体の働きにおいて「イマージュへとアクチュアル化された記憶は、純粋記憶とは深く異なっている」(MM156)とされるのであり、記憶を現在化するという身体の機能は、純粋記憶とイマージュとを境界づけるのである。

2.2 「イマージュ」ないし「記憶」の「消失」

記憶力の障害における、「イマージュ」ないし「記憶」の「消失」についての記述に関しても、上で見たのと同様のことが言える。

1 節で、純粋記憶力に対する身体の二つの機能について見たが、それに対応して、記憶力の障害にも異なる二つの種類が認められる(MR240 / MM104)。これらのうち一方の場合については、MR と MM とのあいだで記述の変更は見られない。この場合には、「知覚とそれに習慣的に付帯する諸運動との関連がたんに断たれている」(MR240 / MM104)とされる[(6)]。

記憶力の二種類の障害のうち、もう一方のものについては、MR においては、以下のように述べられている。「ある場合には、諸イマージュそのものの消失(*disparition*)あるいは少なくとも翳りがあるだろう」(MR240, 強調引用者)。MM においては、この同じ障害は、身体による記憶の現在化の機能に問題がある場合ということになるから、先の記述は以下のように変更される。「ある場合には、古い諸イマージュはもはや喚起されることが出来ないであろう」(MM104)。

他にも、記憶の「消失」に関する同様の変更として以下のものがある。MR においては、記憶力の障害において「視覚的諸記憶の消失(*disparition*)は、きわめて普通の事実である」(MR240, 強調引用者)とされているが、MM においては、以下のように変更されている。「視覚的諸記憶の一見した廃棄(abolition apparente)は、きわめて普通の事実である…。我々は、どの点まで、またどのような意味において、諸記憶が現実に消え去り(s'évanouir)うるかを自問するべきであろう」(MM104-105)。

以上に見てきた変更から次のことが言える。MM においては身体による諸記憶の「現在化」がなされていないとされることになる場面で、MR においては、「諸イマージュ」ないし「諸記憶」は「消失」したとされ、それ以上議論も展開されないのであるから、身体による記憶の現在化の機能はまったく考慮されていなかった。そして MM において身体のこの機能がいったん考慮に入れられると、「イマージュ」ないし「記憶」は、「消失」したと言われずに済むことになるのである。

2. 3 「意識」

同様のことが、「意識」という語の用いられ方に関しても言える。

MM においては、「意識」という語の「心理学的な領域における」用いられ方が、明確に「限定される」(MM157)。「心理学的な領域においては、意識は存在の同義語ではなく、たんに現実的行動あるいは直接的(immédiate)有効性の同義語」(MM156-157)とされるのである。

そこで、MR においては、諸記憶は「意識のうちにとどまっている」(MR385)とされている箇所が、MM においては、「諸記憶は意識へと呼び戻される(rapplés)ことができる」(MM126)と書き直されている。

ところで、「記憶が意識へと呼び戻される」ことを可能にしているのは、つまり、記憶を、身体に対して力をもつ、有効なものとすることを可能にしているのは、やはり、記憶を現在化するという身体の機能なのであった。それゆえ、MR から MM にかけて見られる「意識」についての先の変更は、記憶を現在化するという身体の機能が MM において新たに明確化されたことと連動している変更であると言える(7)。

以上、2.1 から 2.3 で見てきた変更から、MR から MM にかけて、記憶力の先端として記憶を現在化するという身体の機能が、新たに明確化されたがゆえに、MM において、「イマージュ」や「意識」という語の用いられ方が新たにされたと考えられる。

3. 結論

2 節で見てきたように、MR から MM にかけて、記憶を現在化するという身体の機能、つまり「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能が、新たに認められたのであるなら、1 節で見たように、身体のこの機能は、記憶力全体の前進の先端として過去を未来へと押し進めるものであったのだから、MR から MM にかけて、身体に対して、記憶力がなす過去から未来への前進の枠組み(8)という、時間的な地位が認められたと言える。

こうした事態は、MR から MM にかけて、身体の記憶力についての以下の記述が新たに

書き加えられたことによって端的に示されていると考えられる。

「記憶力の実践的な、したがってまた通常の働き」(MM82)である「再認」について、「では結局、再認とは何であって、我々はそれをどのように定義すればよいだろうか」(MR237 / MM100)と、再び根底的に問い直す文の直後に、MM においては以下のように書き加えられているのである。「まずはじめに、極限において(à la limite)、瞬時における(*dans l'instantané*)ある再認、すなわち、いかなる明白な記憶も介入することなしに、身体だけで可能なある再認がある。この再認は行動に存する…」(MM100)。そして、1.4 で、「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能について確認したことから、この「瞬時」とは、過去から未来へと向かう傾向をもつと言えよう。

では、MM における、身体の機能の時間的な地位の導入は、MM 全体に対していかなる意味をもつものと言えるだろうか。

記憶力の先端としての身体は、1 節においてすでに見たように、客観的な物質的世界の一部を成すものでもある。そこで、記憶力の先端たるかぎりで記憶力そのものからは区別されることの出来る、身体の働きにおいては、「主観と客観の一致」が認められると言えるだろう。

ところで、MM の第七版序の冒頭部にあるように、「この書は断然、二元論的である」(MM1)とされる。とはいえ、MM が掲げる二元論は、従来の二元論とは異なるものとされ、「本書は、二元論が常に引き起こしてきた理論的諸困難を、取り除きはしないまでも大いに軽減させる望みのある方法で、身体と精神を考察する」(ibid.)。それゆえ、MM の全体的理解は、MM における「二元論」がいかなるものであるかを明確にすることにかかっていると言ってよいだろう。MM における「二元論」について、ベルクソンは、以下のようにも述べている。「主観と客観」との「一致」から「出発して」、「精神と物質という両項の発展をそれぞれの持続のうちに押し進める二元論においては、困難は少なくなる」(MM248)[9]。

そこで、MM において新たに導入された、記憶力の先端としての身体の記憶力の働きは、MM の二元論がそこから「出発」すべき地点として、一冊の書物としての MM の全体構造を統制していると考えられる。

さらに、著者が「この書物の最後の部分から引き出そうとしている結論」として、「主観と客観、その区別と統一にかんする諸問題は、空間の関数というよりむしろ時間の関数として提起されねばならない」(MM74)と言われている。これはつまり、MM における二元論においては、先に述べた、「主観と客観」との「一致」を出発点としての、「精神と物質という両項の発展」の「押し進め」は、「時間の関数において」なされるべきだということである。それゆえ、MM の二元論の出発点とは、より正確に言えば、身体の記憶力の働き

の時間的地位—「瞬時における」ものとしての—に見出すことが出来ると、言えるのである。そして、この「瞬時」とは、過去から未来へと向かう傾向をもつものなのであった。

本稿の以上の考察から示されるのは、「瞬時における」身体の働きを出発点とする MM の二元論が、MR の執筆段階においてはなお構想されておらず、MM の執筆段階において構想された可能性があるということであり、そうであるなら、MR と MM との比較を通じて、MM の二元論の以下のような性格がより鮮明に照らし出されると言えるのではないか。すなわち、「瞬時における」身体の働きとは、未来への傾きをもつものであったから、一冊の書物としての MM を特徴づける MM の二元論—「瞬時における」身体の働きを出発点とするところの—は、未来へと向かう時間において、「精神と物質」を捉えるものである、ということである。以下のように言うことも出来る。ベルクソンは「記憶力」という語に「特殊な意味」(MM250)を与えている。それは、「未来に向かっての過去と現在の総合」(MM248, 強調引用者)、あるいは、「ますます深く未来に働きかけるためにますます過去を保持する(retenir)ことを可能にする内的な力」(MM249-250, 強調引用者)、というものである。MR と MM とを比較することで、この「特殊な意味」における「記憶力」こそが、MM の全体構造を統制しているということが、より明瞭に示されると考えられるのである。

註

(1) 本稿では、« mémoire »の訳語として、「記憶力」という語を画一的に用いることとする。

(2) 以下、/で区切って MR と MM との頁数を記してあるものは、MR と MM とに共通の記述である。なお、MR からの引用については、雑誌 Revue philosophique の 1896 年 3 月号と 4 月号における頁数を記してある。

(3) 「S には身体のイマージュが集中する。またこのイマージュは面 P の一部をなしていて、平面を構成するすべてのイマージュから出てくる諸作用を、受けたり返したりするにとどまる」(MM169)。S に位置づけられるものが、「私の現在」と言われたり「私の身体」と言われたりするのは、「私の現在は、私が私の身体についてもつ意識に存する」(MM153)ということのためである。

(4) 同様のことが、以下のようにも言われる。「古い知覚を引き延ばしたところの脳のある種の現象を、反復することで、身体は記憶に、アクチュアルなものとの接合点を、現在の現実に対しては失われている影響力を回復する手段を、提供するだろう」(MM253)。

(5) 「記憶が問題となる場合には、大方の心理学者は、それをイマージュのかたちでしか、すなわち、生まれかけの感覚において具現化されたかたちでしか、みとめない」(MM155, 強調引用者) ;「私の過去のうちから、…役に立つことができるもののみが、イマージュとなり、したがって少なくとも生まれかけの感覚となる。しかし、それがイマージュとなるやいなや、その過去は純粋記憶の状態を離れ、私の現在のある部分と融合する。それゆえ、イマージュへとアクチュアル化された記憶はこの純粋記憶とは深く異なっている」(MM156, 強調引用者)。

(6) 1 節で見たように、記憶の現在化を可能にするのは、「記憶力を現在に結びつける」という身体の機能のほうであるから、「記憶力を実在へと方向付ける」という身体の機能において障害がある場合でも、前者の機能が正常であるなら、MM においては、「諸記憶はなお喚起されている」(MM119)と言われる。具体的には、以下のようなケースがそれに当たる。「ヴィルブラントが研究した症例においては、患者は、目を閉じたまま、自分の住む町を描写することや想像上でそこを散歩することができた。ところがいったん町へや

ってくると、患者にはすべてが新しく思えたのである。彼女は何ものをも再認せず、方向を定めることもできなかった」(MR236 / MM99)。

(7) 無力なものから有効なものへ、無意識的なものから意識的なものへ、というダイナミズムが MM において新たに導入されたことを示す変更として、他にも、以下のようなものがある。MR では、「再認はある古いイマージュの保存を含むものではないのであり、また、諸知覚と古い諸イマージュとの同一視(identifier)に成功することなしにこれらの諸イマージュを保存してしまうことができる」(MR237, 強調引用者)とあるが、MM では次のように変更されている。「あらゆる再認はつねにある古いイマージュの介入(*intervention*)を含むものではないのであり、また、諸知覚と古い諸イマージュとの同一視に成功することなしにこれら諸イマージュに訴える(*faire appel*)ことができる」(MM100, 強調引用者)。

(8) 「並進」の運動において、「記憶力自身が我々の過去の全体とともに前への押し出しを遂行して、自らの可能な最大部分を現在の行動に組み入れる」(MM187, 強調引用者)とされていたことを思い出されたい。

(9) テキストには実際には「そこにおいては主観と客観が一致する(le sujet et l'objet coïncident)ところの純粋知覚から出発して、精神と物質という両項の発展をそれぞれの持続のうちに押し進める二元論においては、困難は少なくなる」(MM248)とあるが、本稿においては、「純粋知覚」それ自体がいかなるものであるかについて踏み込むことはしない。なお、「純粋知覚」の理論は、MM 一章において主題とされるものである。

文献

Bergson, H. (2008). *Matière et mémoire.* Paris: Presses Universitaire de France.

――― (1896). ‘Mémoire et reconnaissance’, *Revue philosophique*, *4*, 225-48, 380-99.

Robinet, A. (1960). ‘Le passage à la conception biologique de la perception de l’image et du souvenir chez Bergson’, *Les Études philosophiques*, *3*, 375-88.

〔京都大学大学院修了・哲学〕